

台湾タイヤル族の日常の生活圏と人間集団の分類

山 路 勝 彦

1 近世文献にみる人間集団の記述

言語はもとより、皮膚の色、体つき、さらには風俗習慣などの面で異質性をもった人間集団に遭遇したとき、その異質性を強調して範疇化する試みは、あらゆる社会でみられる現象にちがいない。東夷、西戎、南蛮、北狄という、漢族を中心において周辺住民を分類した古代中国の異族観は有名だが、このような体系だった“中華思想”に基づかないでも、周辺住民を自己とは区別して位置づける試み自体は、どのような社会でもみることができるはずである。この中国の例は、周辺住民を第一義的に文化の高低という基準で、つまり漢文化の光被に浴しているかという点に基づいて分類したものであることは明らかであるが、一般に民俗レベルでは、自己の世界と周辺住民との相異を強調するさいの規準点は、あるばあいは身体形質の差異であろうし、あるばあいは言語なり生活習慣の相異であろうし、またその両者が混然一体として総合され差異がことさら強調されることもある。

身体形質の差異は視覚的に即座に異様性を感じさせるので、人間集団の異質性を強調するさいのありふれた基準となりえたであろうし、人類学では長い間、「人種」という分析用語がこの種の研究に用いられてきたが、民間でも明治以来、このかたの長期間にわたって、皮膚の色に着目した、「白色人種」、「黄色人種」、「黒色人種」という三分類が取りざたされてきた。この分類でいけば、学校教育でも教え込まれているため、たいていの現代日本人は、欧米人とはちがひ、自分たちの皮膚は黄色だと色わけするにちがひない。だが、ここにおもしろい事実がある。それは、日本人の皮膚が黄色と思い込み始めたのは、たぶん明治以

降のことであり、近世の日本人は自分たちの皮膚を「白」だと考えていた節がみられることであった、その事実は有力な証拠によって確かめられる。江戸末期にイギリス船が鹿児島県宝島に漂着したことがあり、そのときのイギリス人の容姿を記述した文書が最近紹介されているけれども、その記録を読むと、日本人はイギリス人と同じ皮膚の色をしていると、当時の人たちは考えていたことがわかる〔鳥越皓之 1981:79〕。すなわち、

頭もいり毛ニて大形赤く又黒きも有之、毛至て短く眼相替し、又日本人へ格別相替も有之、勢（背）ハ皆大きく鼻勝而高く、色ハ日本人同前、衣類ハ大形赤く至て短く腰の上まで有之、（傍点筆者）

この記録からは、身体形質の多くの点でイギリス人とは異なるが、「色」は日本人と同じとみた、当時の人間の観察が注目される。ところが、「白い」はずの日本人の皮膚の色は、明治期に欧米から輸入された「人種学」の知識によって、「黄色」とされてしまったことになる。だがさしあたりこの例は興味深い事実を示していて、白・黄という身体形質上の特徴に基づいた分類はいささか恣意的な試みにすぎないことをここでは知っておけばよいだろう。そこでこの事実を敷衍していくと、身体形質に基づいた「人種」概念は、研究上の分析概念として不毛だとする見解が一方では出されてくることになろうし〔神部武宣 1972〕、他方で分析概念としての有用性を説く鈴木二郎も、人種を「社会的に選択された肉体上の特徴によって区分されるヒトの集団」と規定するように〔鈴木二郎 1976:63〕、「社会的に選択された」という一項を取り入れねばならなくなる。なお、鈴木によれば、この概念に対比されるものとして「エスニック集団」が挙げられ、それは「社会的に選択された文化上の特徴によって区分されるヒトの集

団」とされる〔鈴木二郎 1976:63〕。

肉体上の差異あるいは文化上の差異が特定社会によっては社会学的意味をもたされ、そして民俗概念を伴っている現実がある以上、鈴木が試みるように、「人種」ならびに「エスニック集団」という記述概念は、今後もおお意味内容をはっきりとさせる研究が必要であろう。しかしながら、これらの記述概念は特定社会の民俗事象を記述するさい有用性もちえたとしても、すべての社会にこうした分析的用法に見合った民俗語彙が存在しているわけでないことを承知しておく必要がある。個々の社会では、「人種」「エスニック集団」もしくは「民族」に対応する民俗概念がみられないうばあいもあるし、それらの語が指示する内容が渾然として不可分な状態におかれているばあいもある。たとえば近世日本を取り上げてみると、当時は身体形質の特徴だけを抽出し、「人種」という分析的概念で人間集団を区分する試みはなかったであろう、と推断できる。もっとも近世の文献でも「人種」なる漢字は登場する。しかし、それをジンシュと読んでいたのか、ヒトノシュと読んでいたのか、あるいはヒトダネと読んでいたのか、問題は残る。例をあげてみるに、最上徳内には寛政二年刊になる『蝦夷国風俗人情之沙汰』なる著述があって、その序の中に次のように述べた件りがある〔青木虹二他編 1969:442〕。

其根元は倭人の種類にして、異国の種類にあらざる也、それを蝦夷といへば人種の別なる様に思ふは大なる癖事也。

これに引き続いてすぐ後に、赤夷（ロシア人）について、次のように記述する。

是は元来日本人と人種異なる物にて、毛髪赤く眼玉茶色、其内に瞳あり。骨柄も異なり。

ここに「人種」なる語は2回出てくるけれども、後に紹介する諸文献と照しあわせて考えるに、その語は「ヒトノシュ」と読むべきだと思う。文章の内容をみるに、ロシア人を記述したなかでは、ことさら身体形質を取り上げ、視覚的に映る異質性を強調している印象が深く残る。自他の差異を強調するもっとも簡便な方法は視覚的表現形態にたよることであり、なかでも身体上の顕著な差異は好奇心を引きつけるから、差異を問題にするさい、かっこの題材とされて不思議はない。しか

しこの引用文が「人種」という語を使うさい、ただ身体形質にのみ着目しているのではなく、言語・生活習慣の相異をも考慮しているのだと、解釈しても妥当と思う。前段の蝦夷について、根元つまり出自が倭人と同じだから、結局、「人種（ヒトノシュ）」も同じだという説明は、その解釈に根拠を与える。その見解が受け入れられるならば、後段で「元来日本人と人種異なる物」と語るとき、出自がまったく異なる事実を勘案して、しかる後に身体形質の差異を指摘しているのだ、と判読できよう。

近世日本人も海外事情には関心があつたといえ、風聞・俗説に基づいた珍奇さを狙う書籍物も少なからず見受けられるが、他方では漂流民の口述を編纂した文書も存在していて、当時の海外認識の実状を垣間みせてくれて、興味がもたれる。次郎吉の口述、古賀謹一郎（憂天生）手録による幕末の『蕃談』はそうした文書の一つだが、海外の未だ見たことのない住民を記述するさいに、「種民」、「種人」、「民種」、「種衆」、「種族」という語彙が使われている〔青木虹二他編 1968〕。これらのことばは、平易な現代語に翻訳すれば、さしずめ「人びと」の意であり、漢字知識に馴んだ編者の造語にはかあるまい。

幕末の『東航紀聞』は、摂津国の舟乗りが北米大陸にまで漂流し、そこで暮らしたときに見聞した習俗を、後に岩崎俊章が彼らの口述を基に編纂した著書で、難解な漢籍をもふんだんに参照して著わした本書には、当時の文人の外国に対する旺盛な知識欲が滲み出ている。「家族」、「親族」、「血統」などの漢語が登場する点にも興味もたれるが、本稿との関連でいえば、「人物風俗」の項に関心がそそられる。「亜墨利加州の人物三種あり」と記した内容が、それである。〔青木虹二他編 1968:372—380〕。これによると、

其一は中古己来、欧羅巴人航海し、本土の女を妻として出生せし種族なり。……其二は本土人の種類なり。これをインリヨーといふ。此種族衰滅して今存するもの僅なり。其三はアッパチといふ。由来を聞得す。此種族は益々少し。唯欧羅巴種の人物のみ年々滋蔓弥盛にして、今の亜墨利加人は皆この種類なりと云ふ。（傍点筆者、下線原著者）

これに引き続いて、編者は『坤輿図説』を紹介し、「亜墨利加ノ人物数種あり。今別テ三大別トス。一日土人種、二日西洋人種、三日コリウラレンス人種云云」とその著作には記されているから、漂流民の記述とは若干の相異がある、と注釈を施している。ここに登場する語彙には相応の吟味をしなければならないが、「人物」の「種類」として分類されたさいの規準は、身体形質の相異であり、装身具・婚姻制度・礼儀作法・生業などの習俗上の事柄であり、そして先祖との出自関係の違いであることが、文面を通して理解される。

時代をやや溯って、本田利明の『西域物語』（1798）を検討してみると、「人物」、「人種」、「種類」などの語が頻繁に使われているのに気づく。漢字教養のため、「四夷八蛮」などの表現が随所にうかがわれるのだが、さしあたり次の表現に心しておくべきである。すなわち、

未だ人道開けざるは撫育丹誠して教化し、いまだ無人なる国土は人種を蒔き、……

あるいは、

最初は無^レ人国杯も有^レたるを、或は人種を蒔きたるもあり。

ここでの「人種」とは、訳注者もみるように「ヒトダネ」と訓ずるべきであろう。なお同書には「種類」という語も頻繁に登場している。すなわち

此島土人多^ク衣服明製、文字楷書を用、種類日本人の如し、

あるいは、

人物皆日本人の種類にて、則蝦夷人の如し。

経世家としての本田利明は、外国事情について多くの著作を著わしたのだが、彼がそうした地域の住民を叙述するには、記述的に、たとえば「蝦夷人」、「支那人」、「和蘭陀人」、「エゲレス人」と用い、「夷狄」、「四夷八蛮」などの抽象化されたことばは使っても、ことさら人間集団を弁別する記述概念は用いてはいない。ただ「(人の) 種類」という語で表現するだけである。この用法は、荻生徂来の随筆『南留別志』（1736）にみるのと同じである。荻生は「蝦夷」について、かくいう。

蝦夷は、国の名にあらず、人の種類なり。国栖、土蜘蛛、皆しかり。隼人といふも種類なり。（傍点筆者）

近世では、今までにみてきたように、異なる人

間集団を固有名で記述的に、たとえば、「・・・人」というように呼ぶことが多く、人間集団を分類する抽象的な分析概念を用いて記述することはなかったといえる。もちろん、よく知れわたっている「夷」「蛮」の用法はあるし、「黒坊」という表記もあったが、「人種」なり「民族」なりの、今日よく使われている記述概念はなかったのである。異なる人間集団を記述するにあたっては、「人の種類」というにとどまり、そしてその分類規準はといえば、状況に応じて可変的に身体的特徴、言語、生活習慣などの諸点を考慮したものだっ

ところで本稿は台湾タイヤル族を対象とし、彼らの日常生活圏の実像を明らかにしながら、その周辺の住民たちを彼らがいかに捉えていたか、を記述しようとする試みである。それにもかかわらず、ここに近世日本を引き合いに出したのは理由があつてのことであり、それは、両者ともに異なる人間集団を把握するに、身体形質と文化的側面のいずれのみを強調する抽象的な概念をもたないからであり、異なる集団を認識する規準には、言語、風俗習慣、身体形質のいずれも尺度としているからであり、これらの点で両者を対照させてみることがいくらかでも参考になると判断したからである。もとより本稿は人類学で使われてきた分析概念の妥当性を検証したり、精練したりするのが目的ではなく、民俗レベルでの人間集団の把握方法をできるだけ、そのまま尊重して記述しよう心がけた、きわめて抽象度の低い論考である。だが、ここで一言附記しておく事柄があつて、それは以下の表記に関わること、すなわち、表題および文中でタイヤル族と表記するよりは、むしろタイヤル人とすべきだという見解に関してである。「人」を指称するタイヤル語はあるけれども、それに対して日本語の「民族」、中国語の「族」、もしくは同じ台湾のプヌン語でのシドック si'doq に該当する語彙はタイヤル語の中に見当たらないという、すこぶる単純で、さして建設的でもない理由にそれは基づいている。後二者、すなわち「族」と「シドック」はリネッジもしくは氏族を指示する語であるとともに、今日ではふつう生物学的概念とは区別された文化的概念として使われている「民族」の意味をも持ち合わせているのだけれども、とくに「シドック」に関してはさらに興味深

い内容を包含しているのに注意されたい。すなわち、

si'doq 狭義には氏族(大, 中, 小)の意に用いられるが, その外, 部族や種族をも指す。またこの語は「種類」の意で動植物にも適用せられる。例えば, 粟, 黍, 里芋等も夫々一つの si'doq であり, ……鹿・牛・山豚等も夫々一つの si'doq である。[帝国学士院 1941: 154]。

ブヌン語のような重宝な語彙がタイヤル語にはなく, 「人の種類」を総合的に把握する語彙が欠落していることは, この種の記述で不便を感じさせる。しかし, タイヤル人という表現は無難としても, われわれにとっては耳慣れぬ用語なので, 日常日本語の用法に従い, 「人の種類」という漠然とした意味内容を持つ日本語の「族」なる語彙を用い¹⁾, ここではタイヤル族という表記法を採用しておくほかはない。

2 日常の生活圏

台湾北部の山岳地帯に居住し, 粟・陸稻などの焼畑栽培を営み, 狩猟にも興じていたタイヤル族に, 急激な社会変化の波が押し寄せたのは, さほど古い時代のことではない。日本の植民地下にあっては, 「皇民化」政策に基づく「撫育」教育が推進されたこと, 稲作が導入されたこと, 戦後にあっては, 交通網の整備に伴い, 漢民族との直接的・間接的接触によって市場経済が浸透し, かつテレビを媒介として情報量が著しく増大したこと, などを指摘すれば, さしあたってはこの変化の内実が理解できるだろう。

現今でこそ, たとえば気象衛星による東アジアの天気図がテレビの画像に大きく映し出されたり, 国際政治の動向が毎日のように放映されたりして, 著しく彼らの外界認識は豊かになったのだが, 日本統治以前では, 台湾が一つの島であること, その島にはブヌン, ツォウ, アミ, パイワン, ルカイ, プユマなどのさまざまな人間集団が住んでいること, こうした知識は今ではありふれた常

識であるが, 当時では未知の事柄に属していた。これらの知識が普及していったのは, 日本の植民地当局が「撫育」教育を展開していく過程で学童に教え込んだからであり, また「理蕃」政策の必要から村の有力者を台湾中に巡遊させ外界の見聞を広めさせた結果でもある。かくして日本統治以降, 彼らの外界認識は時代を追うごとに深められていき, そして現在に至る。現在の知的環境は, たぶんに都市化された住民のもつそれであり, 過去を回想するときはその濾過装置を通してことになるから, 日本領台以前の状況を復元するのは困難な仕事といえるが, 以下は, 現在に伝えられている口碑伝承などをたよりに彼らの外界認識の様相を復元してみる試みである。

前置きの意味もこめて一般的な話をしておく。最初に今までの研究史を顧みながら, 地域差を考えることにしよう。広範囲にわたって分散居住する関係で, 客観的に眺めわたせば, 現在タイヤルと概括して称される集団にはかなりの地域変差が見出せると, これまでに言われ続けてきた。言語上の地域差を取り上げれば, たとえば「人間」を指す語彙として, スコレク sqoleq, ツォレ tsu'ole', サデック sadeq と異なった名称がみられることを指摘すればよいだろう。風俗習慣のうえでも地域差がみられ, 旧慣時代では, たとえば彼らは青年期に達すると入墨を額と顎に施したけれども, その紋様をみると, 額に縦線一条を入れる地域, 一条入れるにしても細く幅も狭く入れる地域, 数条並列して入れる地域というように地域差が認められる。彼らの始祖発祥伝説でさえも地域的異同がうかがえるのであって, かくして『台湾高砂族系統所属の研究』では, 前述の人間を指す語彙に基づいて三大系統を設定するに至った[台北帝大土俗・人種学研究室 1935 a]。発祥伝説とのかかわりでこの三大系統を補足して説明すれば, 次のとおりである。

1) スコレク系。ピンスブカン Pinsbukan を発祥地とするもので, ピンスブカンとは「岩の割れたる所」の義である。太古この岩が割れて, その中から昔の祖先が生れ出たと説く

1) 「広辞林」には次のような記述がある。

ぞく〔族〕①同じ血統の者。一門。一家。

②一定の範囲を形成する同種類のもの。「斜陽一」

系統。

2. ツオレ系。大覇尖山 Papak-waqa を発祥地となし、この山を下って子孫は各地に散じたと語る系統。

3. サデック系。白石山 Bunohon を発祥地となし、ここの原木の枝間から男女が生まれ、その子孫たちが広がったと伝える系統。

もちろん、以上の分類は研究者が設定したものであって、スコレク系、ツオレ系、サデック系という命名での分類を地域住民が採用している訳ではないし、そのように彼らが自称している訳でもない。けだし、これら三系統は風俗習慣のうえで相異点よりも類似点がはなはだ多く、そのために学術上の分類ではこれら三系統はともにタイヤルと認定されているし、今では学校教育の影響もあって、いずこの学童たちも中国語で「泰雅族 tai ya zu」と表記しかつ発音するのだが、学術上の名称として現在ふつうに通用しているタイヤルという語彙自体が、日本渡台以前には、全域にわたって通用していた訳ではない。タイヤルは地域によって atayal, tayal, itayan, itaal などと発音されるが、タイヤルと自称するのは、スコレク系とツオレ系だけであって、サデック系ではそのようには自称していかなかった〔馬淵東一 1914(1974:247)〕。

さて、本稿に登場するタイヤル族は西部山脚地帯の苗栗県泰安郷汶水地方（現・錦水村円墩）に居住していて、さきの研究上の概念に従うとツオレ系に属する人たちである。自称を Itaal といい、大覇尖山を発祥地とみなす口碑伝承を現在に語り伝えている。伝説によれば、

昔、Itaal の祖先は Papak na Waqa（大覇尖山）で生まれた。そこの頂上の岩が割れて男女の2人が生まれ、彼らから子孫がふえた。大覇尖山は洪水伝説とも結びついて語られる。

大洪水が押寄せてきたとき、山頂にみんなで逃げた。犬・豚などを海に投げ入れ otox（神）

に祈願したが、波は引かない。大洪水は、破倫の行為を男女がしたために、神が怒って引き起したのである。そこで姦淫した男女を海に投げ入れたところ、洪水は引いた。

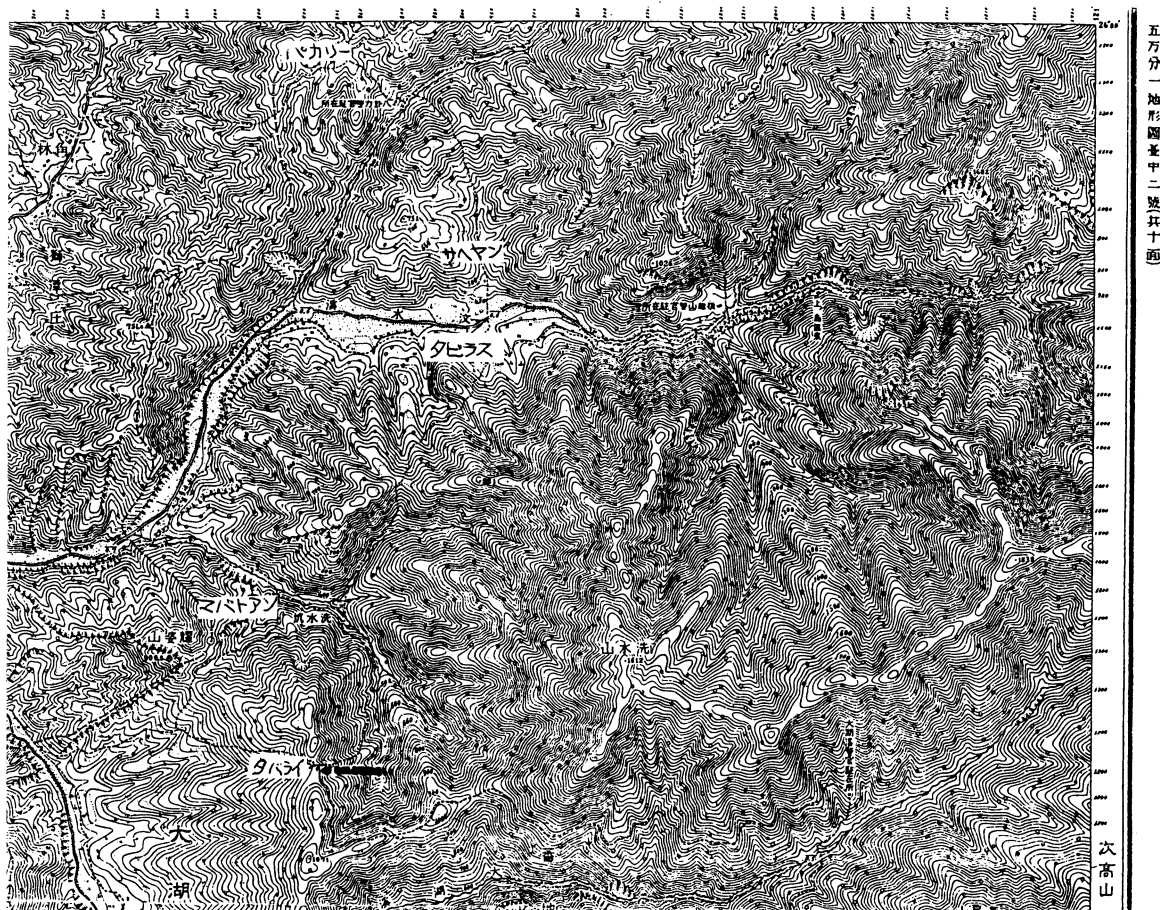
神話的色彩で濃く塗りつぶされた祖地から、子孫たちは尾根伝いに、あるいは溪谷に沿って各地に四散した、とこの地方の住民は語って聞かせる。どのような経路を辿ってこの地方に移住してきたのか、詳細はすでに不明だが、いくつかのガミル gamil が共存するところから村建の歴史は複雑に織りなされているのがわかる。ガミルの原義は「木の根」のことであるが、転じて祖地との関わりを指す語としても使われている。昔の祖先は大覇尖山から下りてきたと伝えるが、どの経路を辿って下りたかによってそれぞれ特定の名称が与えられている。その名称は主にかつて居住していた故地にちなんで命名されているが、その名称によって類別化された集団のことがガミルにほかならない。

汶水地方の地理的景観については、第1図を参照していただきたい。平地帯を流れる後龍溪を溯り、その支流の汶水溪をさらに上流へと溯ると、その沿岸に四つの村落が点在する。その四つの村落 qalang の名称は、ツァワシェク（通称、横龍山）Tsawasyeq、サブロク Sabuloq、タビラス Tabiras、サヘヤン Saheyan であり²⁾、そのうち前二者は昭和初期に日本当局の勧告で移住したきたスコレク系住民の村落である。この附近一帯の集落は、海拔にしておよそ500メートル程度の高さにあり、平坦部は乏しく、山腹の斜面に人家は立ち並んでいる。ただし地付き村落であるタビラスは、日本統治時代は現住地よりやや高い山腹に居住していたといい、ちなみに『高砂族調査書』によれば〔台湾総督府警務局理蕃課 1938:95〕、汶水溪左岸洗水山西北山腹標高1,400尺乃至3,500尺の高所に位すとある。旧慣が支配的であり、日本当局の勧告に

2) ただしサヘヤン Saheyan は日本人による命名。元来は Tenabulan と呼ばれていた。タビラス Tabiras は元来、この地域一帯の中の一部の名称もしくはそこに居住していた人のガミル（前出）の名称。総称して、この一帯は、すぐ後で本文で触れるが、マイリナフ Mairinax と称せられていた。日本時代になって、このタビラスの名をとって村落名にした、と伝えられている。他の二つは地付き村でないで、以下、本稿の記述から外す。

なお、『蕃族調査報告書』に「汶水蕃」として列挙されている村落名には、バカリ、タビラス、マオー、サヘヤン、サブロク、セツガオン、ハロー、サガタの八村がある。しかしこれらのうち4社は当時すでに他所へ移住してしまっていて現存していなかった〔臨時台湾旧慣調査会 1920:3—4〕。

第1図 マイリナフ近辺の地図



よる低地移住もまだ少なかった、1929年当時のタイヤル族は、概括して総人口の三分の一強が1000—1500メートルの高度に居住し、ついでその28.4%が500—1000メートルの高度に居住していたので〔鹿野忠雄 1938：39〕、この地方のばあいはさほど高所に居住していたのではないけれども、かといって標準的な高度を下回る訳でもない。

タピラスとサハヤンは溪谷を挟んで相対峙しているが、この二村の村建ておよびそれ以後の経過はともに複雑であり、それは開拓によって、さらには周辺村落そして日本当局との抗争によって移住に迫いたてられたためで、しかもそれらの事件は過去に頻繁に起ったため、である。ここで、さきに引用した『高砂族調査書』を再び参照してみよう。タピラスについての記述は次のとおりである〔台湾総督府警務局理蕃課 1938：95〕。

大安溪右岸・現・象鼻附近に居住し居りたるが5、60年前チュウブス社方面に移住。明治3年頃洗水山北麓に移住せるが、同36年10月隘勇線前進せらるや土地を奪取せらるるものと誤解し、線外タピラス溪附近に逃避し、同40年嘆願し帰順を許され旧地に復帰す。同43年5月シャカロー蕃出草の際凶蕃を通過せしめたる責を問はれ、北坑溪流域洗水山麓に逃避し凶行を逞ふせるが、大正2年6月帰順を許され現居住地に移住す。

台湾総督府によるこの記録がどこまで正確かは、すでに立証すべき手だてが失われている現状では確認することが不可能だが、別の文献では、この村の有力な地付き系流である、ガミル・マイリナフに関して、

その祖は昔大霸尖山より発祥し、大湖溪を下って汶水溪の流域に来った

と説かれていて〔台北帝大土俗・人種学研究室 1935 a : 60〕, 移住の経路も一樣でないことを暗示している。なお筆者が聞き得たところでは, 次のような伝承が残されているので, ここにふれてみよう。

最初にこの地にいたガミルはマカマカウ ma-qamaqau であったが, この人たちは移住していなくなり, その後, タビラス tabiras とツァブロク tsabuloq のガミルとが現在の村をつくった。サヘヤン村に関して付け加えれば, その後苗栗県南部の象鼻方面にいたガミル・タタイラン taitailan が入村し, しかもそのガミルには優秀な人物がいたので, ガミル・ツァブロクは彼に心服して, ガミル名もタタイランに変更した。

移動経路を語る伝承そして村建ての伝承には, たえず改変がつきもので, 伝承自体がどこまで歴史的事実を語ってくれるのか疑問なしとしえないのだが, 少なくとも移住が頻繁に繰り返されたことだけは確かである。そのため, どの村落も雑多な異分子を抱え込み, 複数のガミルを擁しているのが実状であって, たとえば, サヘヤン村では,

taitailan, merealan, masaqeya,

またタビラス村では,

mairinax, sangatax, tsaranga, taoyan,

などのガミルの名称を現在でも聞くことができる。このような実例から推測できるように, 村建ての歴史は複雑であり, 最近でこそ新参者を多数抱え込んでいるのだが³⁾, だからといって, 旧慣時代には誰でもが簡単に入村できる訳ではなく, 新参者が編入されるにあたってはその資格が厳しく吟味され, しかるのちに村民として迎え入れられるのが慣例であった。次の事例は, 現戸主の父の時代に移住してきた例だが, その移住の経緯が詳しく語られていて, 大いに参考となろう。

先祖はかつて Sinobahan (苗栗県南部) 方面にいて, そこから出鉦抗, 八角林, 十一分

地を経て, タビラスに移住してきた。伝染病(天然痘など)が出ると, 全村あげて移住するが, 父の時代には伝染病のため, 移住を何度も繰り返していた。途中で多勢が亡くなり, タビラスに来たのは, 結局 6 戸だけだった。タビラスの「顔役」が父の妹を嫁に迎えていたので, その縁で入村し, 以後, 村民としての権利が与えられた。

移住の動機や規模もさることながら, 姻族関係に基づいて入村が許可されている事実には, ここでは止目しておきたい。すぐ後で述べるが, 土地は村落の総有に帰していたので, 当然ながら, むやみと新参者を村民として迎え入れることはなかった訳であり, したがって入村のさいにはその資格が厳重に問題にされたのである。その資格は, 主に現住民との間の親族(姻族)関係の有無に基づき, 村落の「顔役」などの有力者の許可を必要としたのであって, さきの事例はこの意味で典型的といえる。

この溪谷に沿って点在する四つの村落のうち, 古くからの村落, すなわちサヘヤンとタビラスの住民は, 現在ではともにマイリナフ Mai-rinax の住民と自己を位置づけ, qotox gaga (1 つ・慣習) つまり両村は慣習を同じくする, と意識し, かつ言語も共通していると自覚している。rinax とはこの溪谷一帯の地名の総称であり, 地名などにつく接辞 mai を伴って, マイリナフの住民という訳である。今までは, この附近一帯を指す地名として「汶水」なる語を用いてきたが, これは日本時代の命名であって, 彼ら自身のことばではない。そこで, 以下では「汶水」という語に代えてマイリナフという彼ら自身の呼称を採用して叙述することにしよう。

マイリナフの二つの村, すなわちタビラスとサヘヤンは, それぞれ 30 余戸, 10 余戸と小規模な村落であり, いずれもさらに複数の組 qalang を内含している。地縁集団たる組は, 村の下位単位で

3) 現在これらの村には, 本来の地付き系統でない住民も若干居住している。タビラス村を例にとれば, 次のとおりである。

1. 広東人 7 戸。日本時代に, 警丁として, あるいは日本人の小作として, 戦後に郷公所勤務のため, それぞれ入村した。
2. その他に, 学校の教員と警察官(タイヤル族, サイシャット族, 広東人, 福建人)がそれぞれ若干, そして 3 人の外省人。

あって、現在では中国語によって「鄰」と称されているが、マイリナフ方言は、村と同じ名称の qalang であり、ここでは「組」と訳しておく。この組はタピラスで4組あり、現在でこそ組と組との距離は徒歩で5—10分程度と近接しているが、かつては山間部にそれぞれの組が点在していたので、かなりの遠距離に分散していたことになり、それゆえ実さい上の近所付き合いはきわめて限定された範囲にとどまっていた。しかしながら日常生活をおくるうえでの、もっとも重要な単位は後にみるように、組 qalang の上位概念である村 qalang であり、この村をタオケ taoke が統治していた。タオケとは広東語の「頭家」に由来し、日本時代には「頭目」と称されていたのだが、この地位は世襲的でなく、それに就くには統卒力・寛容さ・弁論術などの個人的才覚が重視され、その役割も実のところは「顔役」という程度にしかすぎない。このように世襲的な権力機構をもたず、平等主義と個人の才覚を重視する社会こそがマイリナフの特徴なのだが、さらにこの社会の生活の内容に迫ってみることにして最初にこの村の領域についてふれてみよう。

マイリナフのそれぞれの村は、独自の領域を支配していて、隣の村と接していたことに注目してみると、彼らの生活空間のありかたがよく理解できてくる。その隣村との境界は溪谷、山の稜線などの自然物が目印となり、タピラスを例にとってみれば、サヘヤンとは溪谷を以って、南のマバトアン Mabatoan 村とは稜線を以って境界線としていた。東方すなわちこの溪谷のさらに上流は、険しい山岳地帯で、現在は移住村ができているが、かつては無人地帯がつらなり、この村の猟場であったといい、西方すなわち下流域は、無人地帯を介して、平地帯とつながり、そこは漢人の居住する地域とみなされ、めったに行くべき地とはみなされていなかった。

焼畑耕作、狩猟、漁撈などが彼らの主要な生産

行為であったが、そうした生活の営みはこの境界内で遂行された。昭和初期から日本当局によって稲作が導入されたが、伝統的な生業は焼畑耕作であって、陸稲・粟が主要産物であった。1960年代初めに土地測量が行なわれ、そのときの占有地が各人の私有地となったのであるが、古来からマイリナフでは土地は村落の総有に帰するものであった⁴⁾。焼畑栽培は、耕地としての利用期間が土壌との関係ではば三年なので、たえず移動耕作を必要とするが、村人は境界内の未開拓の山林を自由に伐採・開墾する権利が与えられていたばかりか、一度耕作しその後放置してある畑地でさえ、開墾権は村人に開かれていた。畑地は、利用状況によってその名称が変わり、たとえば⁵⁾、

qomqomah (qomaqomah) ——現在開いている畑。ただしこれは古語で現代語では mamayah。

naaqao (nagaqao) ——畑地の中でも、とくに第一作のばあいをいう。

nakomi ——畑地の中でも、とくに第二作以降のばあいをいう。

goqei ——すでに使用済みとなり、雑木などの繁茂している休墾地。

というように名称が与えられているけれども、他人が現在時において使用していない限り、つまり既に使用済みの休墾地でも、村人なら伐採・開墾は自由であった。

慣習法が支配する時代、山野での狩猟は日常生活に趣を添えた行為であった。ただし狩猟もまたマイリナフの領域内で遂行されねばならず、境界侵犯は厳重に戒められていた。猟場 qaonam もまた村総有の原則が適用された訳であり、qotox a qaonam というときは、村総有の猟場を意味する。ただし獲物を追跡していく途中で境界線を越してしまう例は皆無とはいえず、そのときに限っては追跡権が認められる。そのような形での領域侵犯は大目にみられるのだが、他村の人に出会った時

4) ここでいう「総有」とは、我妻米編集代表『新法律学辞典』（有斐閣）に基づき、「財産の管理処分機能は共同体自体に属し、その使用収益の機能は各団員に属する状態」をいう。とくに個人主義的な共同所有形態たる共有と異なり、「各団員は持分権をもたず、また分割の請求もできない」という特色を、それはもっている。

5) マイリナフでは、発話者が男性か女性かによって、事物などに対する語彙が異なるばあいがある。畑の名称もその一例であって、カッコ内は女性用語である。以下、男性用語と女性用語とを併記するばあい、断わりのない限り、この要領にて示す。

に限り、獲物の一部を贈らねばならない。それ以外の故意の侵犯は村落間の抗争を引起すことになる。なお、時として数村協同で狩猟を営む機会ももたれたが、それは村落間の友好を深めるのにも役立ったことである。

河川は、飲料水の源泉として、漁業資源の場として、かつ領域の境界線の示標として、日常生活で重要な意味をもつ。この河川を指す語彙は三つあり、形状により段階づけられ、かつ洪水説話と関連して語られる。すなわち、

luliyong——一番規模の大きい川で、マイリナフの地形からいえば「溪谷」の意になる。なお「汶水溪」とは日本時代からの呼称である。マイリナフではその名称がなく、しいていえば luliyong rinax つまり「リナフの溪谷」である。

伝説では、昔、大覇尖山から洪水が引いたとき、鯨 abas が通った跡とされる。海についての知識が乏しく、恐らく誰もが見たことはいはずなのに「鯨」がでてくるのは唐突な感じがするが、この語彙は古くからあり、たぶん想像上の動物のようでもあると、話者が語ったことをここに補足しておきたい。

gaong——中規模の川。谷川。大覇尖山から洪水が引いたとき、うなぎ tolaqe が通った跡とされる。

oko——細い小川。大雨が降ったときだけ水量があり、ふだんは涸れているような小川。昔、大覇尖山から洪水が引いたとき、魚 qoleh が通った跡とされている。

これらのうち、リナフ溪谷はサヘヤン村とタビラス村との境界をなしていて、双方にとって重要な存在なのだが、サヘヤン村が上流（上ノ島温泉附近）、タビラス村がその下流と用益権を分有しつつも、共同漁撈もみられ、いわば「河川同盟（qotox tso luliyong = 1つの溪谷）」を形成していた。とくに漁撈流しによる捕獲作業では、この溪谷に利害関係をもつ両村は共同し合ったのである。

日常生活のおおかたの営みは、このようにして村落の領域内で演じられたことになる。そこで村落内の自然環境は熟知されていなければならない、山、川のみならず道に対してさえも、そればかり

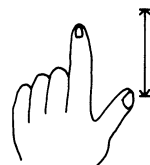
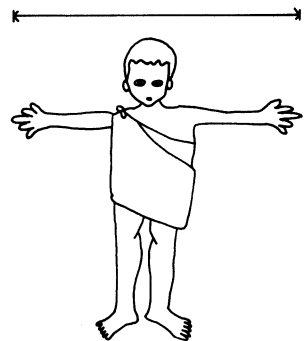
か、一筆一筆に対する畑地にさえも名称がつけられている。畑地に対する命名法は単純であって、たとえば、その地形の特徴によって名付けられるのだが、ともあれ、こうして領域内の地勢図は村民の脳裏に刷り込まれ、自己の生活行為を円滑ならしめたのである。自己の村落内の地勢はこのように熟知していたのに対して、南隣の村マバトアンの地勢についての知識は意外に乏しい。その違いは好対照をなすといえるが、たとえば大勢で狩猟を行なうときは詳しい地名を知っていなければならない、地名を合図・目印として行動していたことを考えれば、その違いも肯けよう。

主要な生産行為が領域内で完遂されたこと、生身の身体こそが活動の主体であったこと、さらにその領域内での移動・運搬も生身の身体に頼らざるをえなかったこと、こうした事柄をつきつめていくと、身体尺度の世界について考えを及ばさずにはいられない。ここでの身体尺度とは、距離・目方などを自己の身体を尺度として計測することの謂であり、旧慣時代では、自己の身体こそが計測の基準でありえた。たとえば、長さに関しては、指・手・足などが規準となって計測される（第2図参照）。すなわち、

イ．手を用いて、

第2図 身体計測の方法

(イ) 手を用いて



(ロ) 指を用いて



(ハ) 足を用いて

gotox tankariqon na qaba. (一回・開いた・
の・手)

saing tankariqon na qaba. (二回・開いた・
の・手)

もしくは、

tan-hareyaqon. 一ひろ

tan-pusaron. 二ひろ (一ひろの2つ)

tan-torun. 三ひろ (一ひろの3つ)

口. 指を用いて、

gotox tenqayawan na tateloling. (一回・先
き・の・指)

saing tenqayawan na tateloling. (二回・先
き・の・指)

もしくは、

tan-hareyaqon na tateloling. (一ひろ・の・
指)

tan-pusaron na tateloling. (二ひろ・の・指)

ハ. 足を用いて、

gotox tenqayawan na kokoi. (一回・先き・
の・足)

saing tenqayawan na kokoi. (二回・先き・
の・足)

これらはいずれも、身体を基にした尺度表現である。この計測法は、身体それ自体から独立して、万人にとって公平な尺度単位として設定されたメートル法とは、明らかに異質である。なによりも身体には常に個体差がつきものであり、計測する主体に応じて偏差値が生じて当然なのだが、さきの尺度表現では、個体差に基づく偏差値は存在しても当然と、暗黙のうちに是認されてしまう。

日本人、ついで漢人との接触により、現在ではメートル法や中国式尺貫法がほぼ完全に浸透しているのだが、畑の面積や穀物の容量を測る単位もまた独特であった。畑の面積を測る単位は複雑化しておらず、平方メートル、歩、坪に相応する尺度単位は存在しない。ただ、ato という称谓があるだけで、それは日本語の「区画」もしくは「筆」に相当する語彙であり、畑の広狭を問わない用語である。具体的な用法は、

gotox tso ato. 1 区画 (1ヶ所の畑の意)

saing tso ato. 2 区画 (2ヶ所の畑の意)

tyugal tso ato. 3 区画 (3ヶ所の畑の意)

この畑より収穫した陸稲や粟などの容量は次のように表現される。

gotox tso kaup. 二掴み

saing tso kaup. 二掴み

tyugal tso kaup. 三掴み

収穫物の単位を示す kaup とは「掴む」という意味であり、文字通り「ひとつかみ」「ふたつかみ」「みつかみ」の意である。ここでもまた、さきの長さの単位でみたと同じように、個体差には大らかである。個々人によって手の大きさが違う訳だから、「ひとつかみ」といっても個体差があって当然なのだが、ここでもそのような個体差を否定して抽象化した万人共通の尺度は顧みられていない。あくまでも個々人の身体自身が尺度の単位なのであり、個性をもったままの身体は捨象されることはない。この意味ではまさしく等身大の世界にマイリナフの住民は暮らしていたことになる。

個体差をもった身体性を捨象せずに、それを計測法の基準となすという思考法は、個々人に対する全幅な信頼がなければ成立しえまい。たとえば収穫物の貸借があったとして、多少の損得がそのときに生じたとしても、そのような損得はとるに足らないものであって、結局は人間は皆、同じ得失の体験を繰り返しているのだという暗黙の了解がその計測法の基礎に横たわっているとみななければならぬ。このような個体差を認めたくえでの計測法は、人びとは共通の生活環境の中で暮らし、同じ体験をなすのだという信念の世界の中でのみ維持されただろうし、そうした信念が等身大の世界を維持させたはずである。

3 周辺の地理的認識

村落内で生活行為のほとんどが営まれたとはいえ、そのことは他村落と没交渉であったとか、封鎖的経済だったとか、を意味するものではない。確かに、麻糸作り、衣類の仕立て、籠類や食器などの製作などは自給できたのだが、時として峠を相対した村落間で交易のあったことを、岡田謙は報告している〔岡田謙 1944:140〕。

(シカヤウ社は) 標高・地質の関係上籐が存在せずまた箕に適する竹が無い為に箕・負籠

・帽子等はこれを峠を越へたピアナン社から
得てゐる。代償として持って行くものは肥松
・豆類・山羊皮等である。

マイリナフでも村落外との交易はなかった訳ではない。たとえば、山刀は日常生活でもっとも用途の広い道具であるけれども、鉄をつくる技術を持ち合わせていなかったのも、当然、交易などによって入手しなければならなかった。平地の漢人から人を何重にも介して間接的に入手したり、もしくは首狩りにさいして戦勝品として略奪したりしたが、いずれにせよ村落外との接触のもとで鉄製品は入手しえたのである。物と物との交易ではないが、村落間との交渉を考えるさい、入れ墨の慣行も重要な交流の場面を作り出していたので、ここに触れてみるに、マイリナフでは施術者ではなく、近隣に頼まねばならず、そのときの謝礼としてカヒノ qahino (女性ことばで qaha) と称される珠貨が支払われた。旧慣時代ではそれは貨幣に相当する一方、呪的な装飾品としても使われた、貴重な財であり、それが村落間を交流していたことになる。

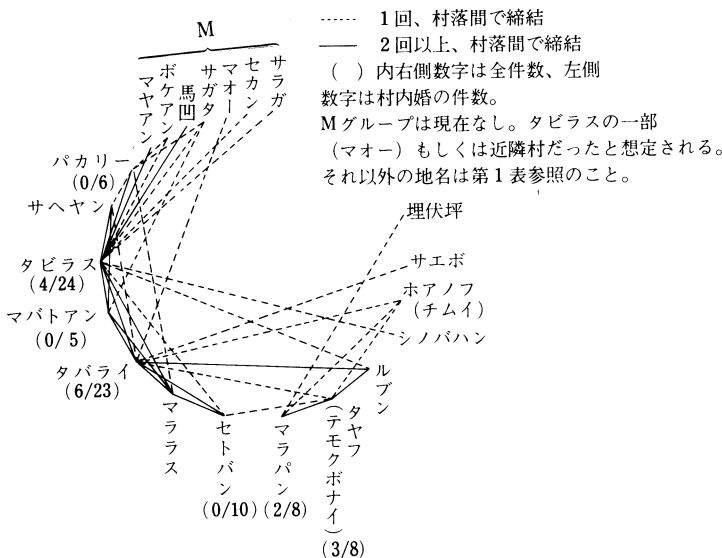
日本統治時代では、植民地警察が交易所を開設し、交易業務を取り行なった結果、各種の産物が流入し、こうして間接的ながら外世界との物的交流が繰りひろげられていた。岡田謙は他の地域での交易について詳細な資料を整理して発表してい

て、それによると、交易所からの購買品では飲食
物・被服・身廻品が大部分を占め、売却品では林
産物・猟獲物が主要品であったのがわかる〔岡田
謙 1944〕。

マイリナフでも事情が同じであって、交易所では、塩・酒・食料品などを購入し、籐・桐・杉・樟・蓮草などの林産物を主に売却していたことが、今なお語られている。ただし交易所は警察の監視化でなされた商取引きの場であり、日本統治の実効をあげるために設置された施設であるので、旧慣時代の本来のタイヤル族の交流の世界を物語るという訳にはいかないかもしれない。そこで警察を介在させた交易の問題を離れ、村落間の交流を語る資料として、通婚圏の問題を取り上げてみよう。過去になされた、この種の詳細な調査資料はないけれども、さきに引用した『台湾高砂族系統所属の研究 (第二冊・資料篇)』には、タピラスおよび周辺村落の系譜資料が収録されていて、断片的ながらも昭和初期までの婚姻状況を知ることができ、大いに参考になる。その系譜資料は特定人物しかも「顔役」ら村落の有力者の1人もしくは若干名の口述に基づいているだけだから、村落の全体像を正確に把握するのは不可能だが、それでもなお有益である。

第3図は、マイリナフと周辺地域での、それぞれの系譜資料に登場する婚入女性84人を対象と

第3図 近隣村との通婚関係



し、村落間の婚姻締結状況を図化したものである。婚出女性をすべて除外したのは重複を避けるためである。この図より、タピラスからみて縁組関係にある村落の領域が断片的にせよみてとれて、村内婚が意外と少ないこと、近隣村との関係が深いこと、しかし近隣村といえどもかなり限られた領域にとどまること、これらのことがわかるのだが、その近隣村との関係については、地名の認知度と関連しているとみてよい。

以下の記述は、サヘヤン在住のB氏が過去を回顧して語る地名の認知度に関する聞き書きの内容である。B氏は日本の年号でいうと大正6年に生れ、「蕃童教育所」を6年で終了し、その在学中に日本式教育を教え込まれた典型的な「日本語世代」に属する人物である。父親はこの村の実力者で、周辺村落をしばしば訪問したこともあり、知的にも秀れた人物であったと伝えられている。小さい頃より、B氏はその父親から各地の事情を聞かされていたといい、かつB氏自身、昭和10年の台湾博覧会を見学に台北に行った経験をもち、きわめて知識欲が旺盛である。ただし山地は交通が不便なので、日本時代では、いくつかの山脈を隔てた南の象鼻村方面（シノパハン Sinobahan）には1回、北にあって、母の故郷である南庄郷（タオ

ヤン Taoyan）には2・3回しか行っていないといい、若い時代のB氏の旅行体験は限られた範囲にとどまる。なお30歳のとき、日本軍の軍隊勤務として五峯郷（キラパ Kilapa）に半年間、滞在した経験があり、この地域の地勢には詳しい。

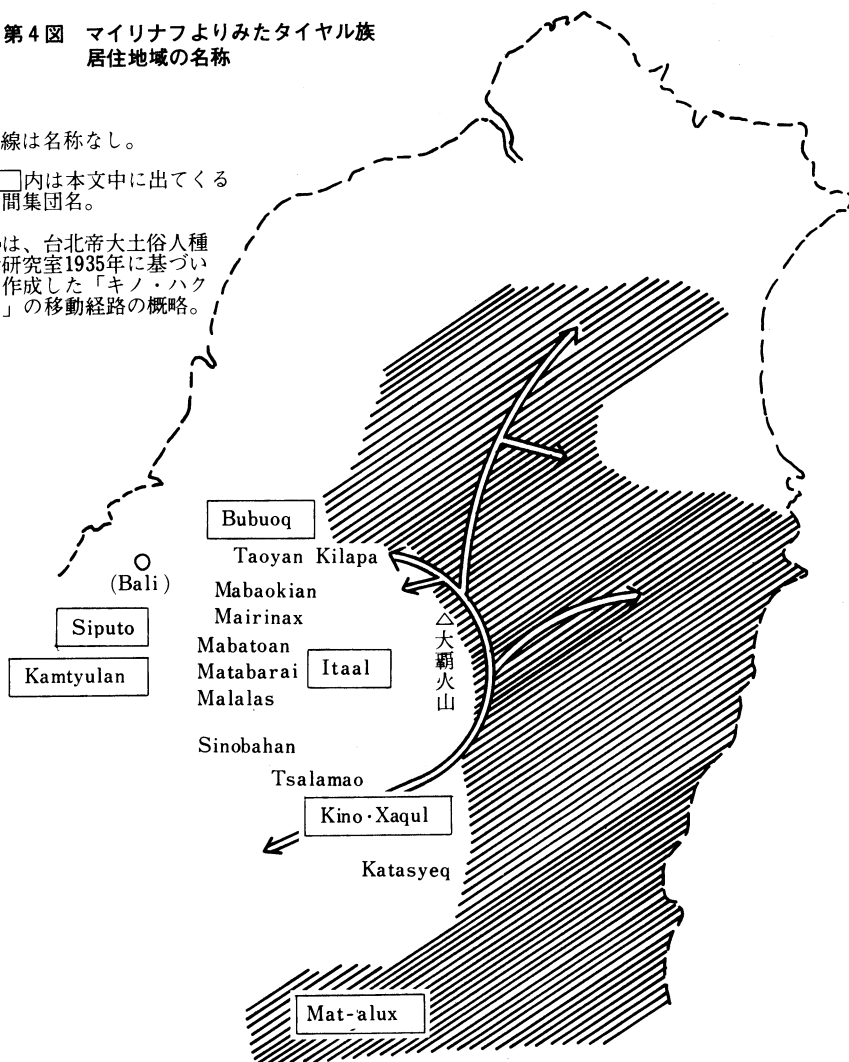
現在の情報機関の発達には、著しく彼らの見聞領域を拡大したし、また最近の漢語による地名表記の出現は、音声上の変化をももたらしたばかりか、その頻繁な使用のため、時としてタイヤル語による地名を忘れさせたのだが、B氏が父親から聞き覚えた、したがってタイヤル語として現在伝えられている地名は別表および別図のとおりである（第1表、第4図）。若干の忘却、記憶の混乱もあるにちがいないにしても、この表を第5図と対比させてみると興味深い。第5図は臨時台湾旧慣調査会編『蕃族調査報告書』（大正7年）に掲載された「太么族分布図」であって、この図で表記される「蕃」とは、ある程度の文化的等質性と地域的近接性を兼ね備えた集団のことである。ただし、このような亜集団を設定する試みは研究者の側でなされたものであって、その設定にさいしての判定規準も研究者の操作によることは、もちろんである。表現をかえれば客観的もしくは学術的な立場に立って地域差を鳥瞰的に把握する試み

第1表 マイリナフよりみたタイヤル語地名の一覧表

地域名	現 存 村 落 名	『蕃族調査報告書』 記載の「蕃」名
Kilapa	Maikalan, Maibarai, Maitakunan,...	カラバイ
	Maisipao, Maipaskowalan,...	パスコワラン
	Maisikalu,...	シャカロー
Taoyan	Tyubus.	鹿場
Mabaokian	Paqwali.	汶水
Mairinax	Saheyan, Tabiras.	
Mabatoan	Mabatoan.	太湖
Matabarai	Tabarai.	
Malalas	Kalihowan.	
Sinobahan	Sakohan (Syetban), Malapan, Mabiluha, Demokubonai, Lubun, Suru,...	北勢
Tsalamao		南勢, サラマオ
Katasyeq		マレツパ, ハック, メバーラ, 万大, 霧 社, トロコ

第4図 マイリナフよりみたタイヤル族
居住地域の名称

1. 斜線は名称なし。
2. □内は本文中に出てくる人間集団名。
3. ⇨は、台北帝大土俗人類学研究室1935年に基つて作成した「キノ・ハクル」の移動経路の概略。



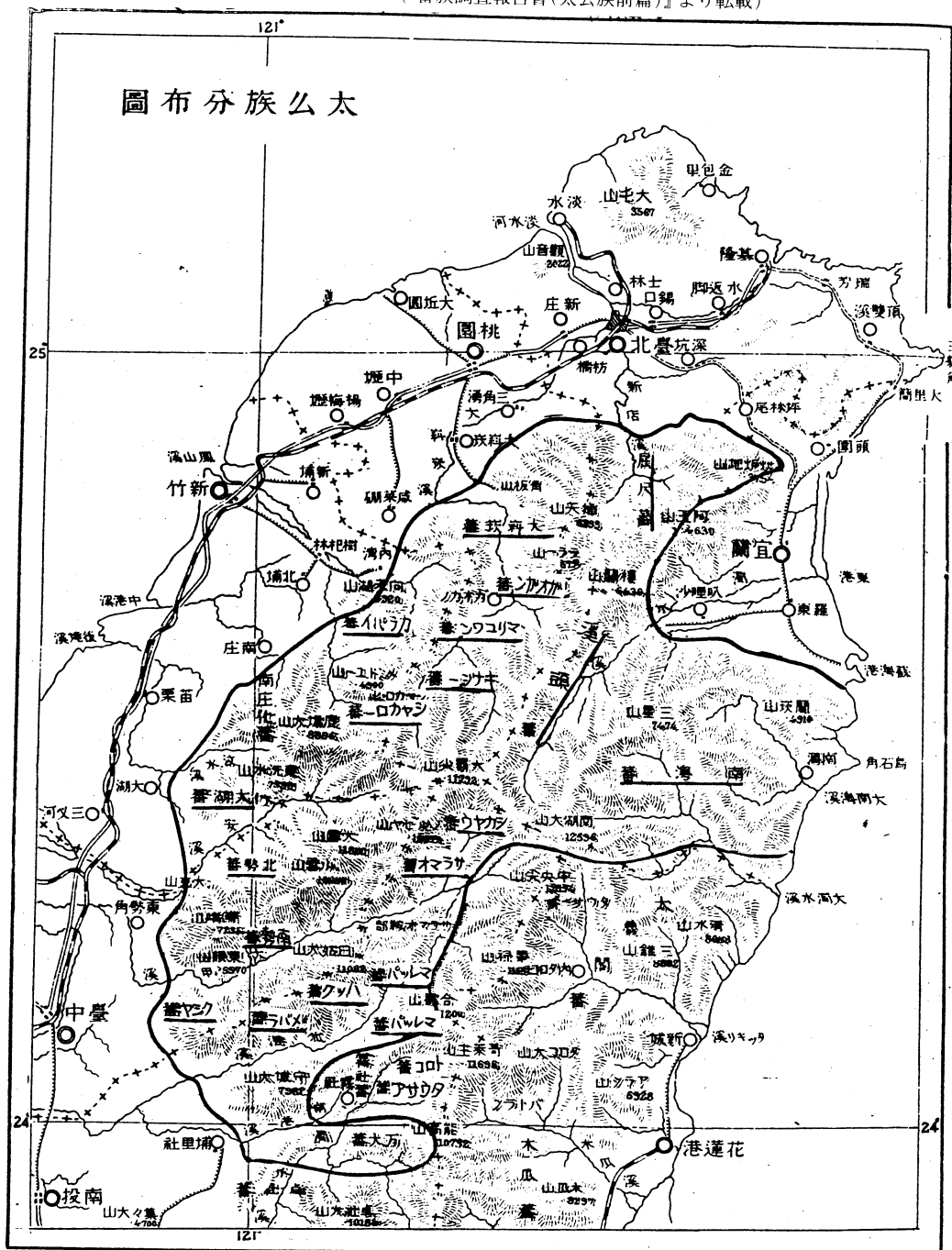
が、結果としてこの図に表われたと言ってもよいだろう。なお、この図で若干の補足を与えるなら、「太魯閣蕃」「木瓜蕃」「霧社蕃」などは、さきに紹介した系統所属の研究では、タイヤル族のサデック系統に属しているが、当時の見解ではその系統は「紗績（サデック）族」として「太么族（タイヤル）族」とは別扱いされていたのである。

第4図を第5図と見比べて、B氏の語り口をとおして復元してみたところの、したがって彼の父が認識していたと想定される範囲は、マイリナフを中心としてきわめて狭い範囲に限定されているのが一目瞭然として理解できる。山脈をいくつか隔てた程度の近隣村なら、村名は詳しく知られているが、その限界点は北はキラパ、南はシノバハ

ンまでであって、おおむね婚姻関係の締結される範囲に限られるようだ。キラパに関してのB氏の認識が豊かな理由はさきに述べたが、B氏の父が多少は知っていたにしてもこれほど詳しくこの方面に知悉していた訳ではないので、この点は割引いて考えておく必要があるとして、これらの範囲に居住する人たちに対しては、明らかに“sami itaal（われらタイヤル人）”としての同類意識を持ち続けてきた。しかしそこから“奥地”に至ると漠然とした知識しか持ち合せていなかったようである。たとえば、第5図に「蕃」という記載を伴って登場する南部の「マレツパ」「ハック」「メバラ」「萬大」「霧社」「トロコ」など、さきの学術分類でいうスコレク系統とサデック系統との二

第5図 タイヤル族居住図

(『蕃族調査報告書(太么族前篇)』より転載)



一万九千九百

つの系統を含んだ地域はカタシエック Katasyeq と一括されてしまう。むろん、この地域の個々の村落名は昔の人には知られておらず、ただ現在かく呼ぶ地域にもイタルはいるらしいとみられていただけで、その地域がカタシエックと呼ばれて

いたにすぎない。現在でこそ、B氏をはじめ村民の多くは天主教会の仕事などでしばしば当地を訪問しているし、日本時代の学校教育でも教え込まれたので、この方面の個々の村落名はマイリナフでも知れわたっているのだが、B氏の父親の時代

までは個々の村落名など知る由もなかったのである。それゆえ、第1表ではこの方面の村落名は省略しておいた。ところで、『蕃族調査報告書』では「ハック蕃」に帰属させられているマシトバオン村ではスコレク系統でも由緒ある村で、附近には巨岩があり、ここから人類が誕生したという伝承を今に伝えているのだが、この村からみてカタシェックとは「霧社」方面を指す。そしてマイリナフ方面の地名に至ってはまったく知られておらず、かくして遠隔地ともなると、当然のことながら地理的認識の精度も漠然としてくるか、未知の状態におかれる一方、同一の地名でも遠近により、その範囲がずれあうことになる。マイリナフの住民には、このカタシェックにも漠然としながらもイタルが居住しているのはわかっていたが、そのイタルはどの系統かまではむろん特定しえず、さらにその南側に至ってはイタルはいないとされ、かわって「まっ黒な人」が住んでいると語られていた。彼らについては後述しよう。

中央山脈以東、およびキラパ以北、たとえば第4図でいう「南澳」「ガオガン」「大崙炭」「屈尺」についていえば、それらに対するタイヤル語での地名をB氏の父親は知らなかったはずだといひ、実さいにマイリナフにはそれらの地名が伝えられていない。いわば無人の地の如くに考えられていたようであるけれども、正確に言えばイタルが居住しているか否かはまったく関心を呼び起されなかったというべきだろう。もっとも、それらの地域は昭和前半から数えて5代ないし8代以前に移住してできた開拓地というから〔台北帝大土俗・人種学研究室 1935 a : 47〕、比較的新しく開拓・植民されたという土地柄ではある。しかし開拓の新しさという事情があったにせよ、少なくとも何世代かにわたってこれらの地域が空白になっていた訳であって、その事実、直接、生活上の交流がまったく及ばなかったことによる。

マイリナフに比較的近い平地帯の知識はいくらか伝わっているのだが、これについては二方面から検討を加えておく必要があつて、その一つはサイシャット族居住地に対する名称である。サイシャット族との関係は後述するけれども、先述の五峯郷（キラパ）と南庄郷（タオヤン）との二カ所を中心にサイシャット族は分居している少数集団

であり、とくに南庄郷では平地帯近くの山脚に住居を定め、かつタイヤル族とも接近して居住している。彼らの住む村落名はもちろんサイシャット語で名付けられているが、そのサイシャット語に由来する地名のうち、マイリナフに比較的近接している地域の村落名は、かなり多くの割合いでB氏および彼の父は知りえている。

他の一つは豊かな水田が展開する平野部であつて、この地帯は漢人の住む地域であるが、平野部と接する山脚地帯は、かなり昔、マイリナフの住民も土地を所有していて、そこは獵場でもあったばかりか、かつては居住もしていたこともあると伝えており、タイヤル語による地名も若干残されている。なお現在の苗栗市周辺はBaliと命名されていて、この方面の知識が皆無ではないことを物語っている。しかし漢民族の居住する平地帯の地名認識もせいぜいのところ大雑把な「地域」認識でしかなく、地勢の詳細さは伝えられていなかったようである。なお、このサイシャット語起源の地名、および平地の地名は、煩雑さを避けるため第1表と第4図では省略しておいた。

・このような事情だから、台湾が一つの島であることさえ、B氏の父親の時代には知られていなかったはずだと、現在の人たちは申し立てる。だが、これとは矛盾する表現だが、マイリナフにはbaruという語彙が聞かれ、それは現在では「海」に該当する語とされているのには注目される。B氏は、その語は「目の届かないほどの水」あるいは「広い水」という語義で使われていたにちがいないと推測する。さらに続けて、昔の人は「海」をみたこともないし、塩辛いかわからなかったと解説を与えるけれども、興味深いことには、そのbaruの向うには「紅頭人」が住んでいる、と何の疑問もなく語り伝えられてきた点である。彼らについては次節で取り上げよう。

以上は、日本統治が始まる前、マイリナフの住民がいくイタルが居住するとされてきた領域に関する話である。繰り返すことになるが、地理的知識が豊かなのは、いうまでもなく近隣地域に限られ、おおむね生活上の交流がみられる範囲である。より具体的にいうと、婚姻関係の締結される範囲内であつて、このことから、社会的体験の世界から地理的認識の範囲は越え出るものではない

い、ということができる。

4 人間集団の分類

マイリナフの住民と通婚関係が結ばれる村落との間には友好関係が築かれていて、それら村落の住民同士では“sami itaal”（われらタイヤル人）としての同朋意識が共有されていた。言語的にはある程度の地域差があるとはいえ、だいたいにおいて、顔つき、風俗・習慣を同じくし、共に大覇尖山を発祥地とみなす点で共通しており、したがって、さきの学問上の分類に従えばツォレ系に属す人たちが、同類として意識しあっていたことになる。

これらの集団が居住する圏域の外延は漠然と知られていたにすぎないが、それでもなおイタールに属す人たちが住むとはっきり認識されていた。言語上の地域差、入れ墨紋様や、仔細にみれば着衣の色彩や型式などにみられる風俗・習慣の相異、これらの点で彼らは容易に識別されたが、基本的には言語は通じ、風俗・習慣も類似しているため、イタールには違いないと認められていた。彼らは「サラマオ」・「カタシェック」方面、マイリナフの東方山岳地帯でリナフ溪谷の水源地にあたる「バブアンパラ babuanpara」方面、「キラパ」の多くの地域に居住し、マイリナフの住民からキノ・ハクル Kino-Xakul と総称されてきた人々たちである。

キノ・ハクルと呼ばれる一群は、さきの系統所属の分類でいうスコレク系にほぼ該当する。その発祥地ピンスブカンの近くの村マシトバオンあるいはマレツパから移住分散していった人々で、あたかもマイリナフやその友好的村落を取囲むような形勢をなして分散している。なおキノ・ハクルとはマイリナフの住民などが用いる蔑称であって、彼らの自称語ではなく、その意味する内容は「首を取って逃げる人」の意のこととされている。長い間、マイリナフとキノ・ハクルとは仇敵関係にあり、とくにマイリナフ東方の、リナフ溪谷水源地方では両者の抗争は大正末まで絶え間がなく続き、獵場をめぐる紛争を引き続いたばかりか、

首狩りの主要な相手でもあった。実さいに大正末年でも、マイリナフの女性がキノ・ハクルによって首を狩られた事件が発生したことがある。それ以後、日本当局の監視の眼が光っていたので、首狩りがこの地では起らなかったとはいえ、両者には以後も反目の時期が続く。マイリナフ東方山岳地帯のバブアンパラ（雪見）地方にまで侵出してきたキノ・ハクルが昭和9年に日本当局の命令で当地に移住し、さきに紹介した二つの村落が新たに出現したが、この新参者と地付きのマイリナフの住民とは仲が悪く、傷害事件を伴う抗争がしばらくの間続いたほどである。このような関係からみてもわかるように、マイリナフの人間はキノ・ハクル系統とは、通婚関係はもちろん交易関係もかつては築くことがなかった。溪谷や山脈によって遮断されて、小地域に分立、割拠する傾向の強いタイヤル族にあっては、同じイタールと認知しあいながらも、その両者の間には同朋意識が形成されることはつい最近までなかったことになる。

マイリナフの住民が自己と明らかに異なると認定した人間集団の一つに、ブブオック Bubuoq がある。マイリナフの北方の五峯郷（キラパ）や南庄郷（タオヤン）に居住し、日本人や漢人にはサイシャット Saisiat として知られてきた人間集団である。マイリナフ近辺のイタールと隣接して住んでいる関係で、さきのB氏の父親も彼らのことばに由来する地名をかなりの程度知っていたことは、すでに記しておいた。

Bubuoq とはマイリナフの住民からする呼称で、自称は Saisiat であり、彼らからみてマイリナフの住民は Sai-papas と称される。要するに、この両者は互いに異種の人間集団として認知しあう間柄にあるのだが、そのさいに、言語のちがいが、衣服や意匠など日常生活で比較的目的につきやすい側面をとおしての生活文化のちがいが、異質性を認めあう直接の根拠となっている。ただし生活習俗の面では、たとえば抜歯、刺墨、穿耳などの慣行でタイヤル族と類似な側面も少なくはないのも事実であるが⁶⁾、言語や生活習慣で顕著に隔たるのは明らかであって、両者は別個の集団と認定さ

6) 『番族慣習調査報告書』3巻ではサイシャット族の身体装飾が記述されているが、その中で、刺墨の起源についてふれられている。すなわち「彼等祖先ノ時代ニハ一切刺墨ヲ為ササリキ。然ルニたいやる族ト接触スルニ至リ屢同族ノ為ニ漢人ト見誤ラレ讖首ノ目的ト為リタルコトアリシカハ、両族協議ノ上ニテ本族モ亦たいやるノ如ク顔面ニ刺ヲ施スコトヲ為リ。襲ヒテ今日ニ及ヘリト」と〔臨時台湾旧慣調査会 1917:53〕。これが歴史的事実か否かは不明瞭なので、何ら論評しないことにする。これら抜歯、刺墨、穿耳の慣習は、日本時代に消滅した。

れている。そればかりか、マイリナフの住民の中には、皮膚の色は同じだが、顔かたちは少し異なり、性格も短気ではないことからいくらか違う、といささか根拠薄弱な紋切型のサイシャット族観を披瀝する情報提供者もいたが、いずれにせよ、重要なのは、身体形質と文化との両側面で詳しい知識を持ち合わせ、包括的な観点から異族だと認識していた点である。

近接して生活していることもあって、相互認識もかなり進んでおり、たとえばサイシャットの祭祀をもマイリナフの住民はよく知っているのだが、歴史的にみても、両者の間には密接な関係がみられるようである。一例をあげると、

汶水溪一帯は嘗てサイシャット族の住地であったがアタヤルに追はれて今の地に移ったと称し、更に竹東郡カラパイ方面の地も嘗てはサイシャット族の住地であったと云ふ〔台北帝大土俗人種学研究室 1935 a : 63—64〕。

このような両者の抗争は、この周辺では、過去に何回もあったとする伝説が、同書には随所にふれられていて、お互いの動向が重大な関心をもって迎えられた時代の長かったことがうかがわれる。だが近時に至っては、交易関係が保たれこそすれ、首狩りの対象にはならず、比較的友好的な関係に立っていたといえる。ただし婚姻関係が取り結ばれるようになったのはやっと日本統治時代から戦後にかけてである。

自己と異なると認定した人間集団は、他に Siputo 広東人、Kamtyulan 福建人が挙げられる。ともに平地に居住する人たちで、顔かたち、着衣などをとおして視覚上の相異が顕著であるとされ、ことばに代表される聴覚上の違いも明瞭であって、異質な人間集団とみなされている。マイリナフの住民にとって、広東人と福建人のいずれとも直接的接触は、日本統治以前では、きわめて乏しかったはずだが、興味深いことには、両者は語彙上、はっきりと区別されている。広東人と福建人との間には、かつては分類戒闘が生じ、両者は反目する関係にあったが、その事実をマイリナフの住民の先祖がどこまで知っていたかは、不明であるにしても、両者は明らかに弁別されていて、しかも旧慣時代では、等しく両者を首狩りの対象に据えていた。しかし他方で、鉄・鉄砲などの武

具を彼らが所有していることに羨望を感じていたのも確かで、知人を順々に介しながら、それら鉄製品の入手に務めていたと今に伝えるから、間接的には交流が行なわれていたことになる。

以上までの三種の人間集団はその実在が知られていたのだが、南の方カタシェック以南に眼を転じると、地理的暗さとともに、そこに居住する人間の実体も不確かなものに映ってくる。日本統治以前にもイタールとは違った人間のいることは知られていたが、どのような種類の人間なのか不明であるとされていた。今日一般にブヌン Bunun という名称で知られている人間集団がそれなのだが、ただ風の便りに得体の知れない人たちが住んでいるとしか思われていなかったのが実状である。彼らは mat-alux と称されるけれども、文字通りに訳すとそれは「黒人」の意である。この語の原義は、「おこげ」ないしは「薪などの燃え残りの黒い部分」をいうのだが、彼らには顔の黒い者がかなりおり、そのために転じて使われるようになったと言われている。この語には、さらにもしろい転用の事実がある。第二次大戦中、「高砂兵士」として出兵したイタールは、南太平洋で色の黒い人たちに会ったが、彼らをやはり mat-alux と呼んでいたという逸話がそれである。

もっとも霧社方面つまりタイヤル南部地域の住民は、ブヌン族と接触する関係で彼らに対してかなり明瞭な輪廓を描いていて、さきに挙げたマシトバオン村では彼らを Maqatina と称し、これに対してその反対に彼らはタイヤル族を Qalavangan と称しており、したがって両者は相互認知の関係にあったことになる。地理的近接性が彼らの存在を認めさせたのだが、タイヤル族とブヌン族とが境を接する地域では、旧来より仇敵関係が生じていて、首狩り抗争が絶えなかったという背景が、その相互認知の関係へと志向させた、とみることができよう。結局のところ、ブヌン族に対するタイヤル族の共通の尺度は存在しておらず、タイヤル族の外界認識は分散割拠する度合いに応じて狭小化しているとみることができる。

マイリナフの住民にとっては、ブヌン族はあまりにも遠方にいるため、視野の中に収めることは不可能だった訳で、そこで彼らの実像もだいたい歪められてしまうし、漠然とした把握でしかなくな

ってしまう。彼らに対するこの漠然とした認識は、むしろ情報の絶対量の乏しさにあるのだが、その乏しい知識の中でもどのような側面がとくに取り上げられて、異質性が強調されていくのか、考えてみることは大切である。そこで“黒い”“白い”という身体の色づけを取り上げてみるに、イタルは日本人、漢人などとともに、自己を *maoba a hei* (体が白い) であり、*maoba raqinas* (白い顔) でもあるとみなしている。欧米人の皮膚の色も *maoba* (白い) にちがいないのだが、ともあれイタルはブヌンとの対比のうえて“白い”と自己を位置づけていることになる。確かにブヌンには漆黒な顔色も多く、それが *mat-alux* と言わせる根拠になっているのだが、イタルと同じ“白人”も中にはみうけられるし、現在ではマイリナフの人もその“白さ”について気がついている。このように皮膚の色には個人差が付きものだが、それにもかかわらず、日常の視野界に入らない対象については、断片的な事柄にすぎないものをことさら強調して全体像とみせかけてしまい、かくして固定的な紋切型の像を練りあげて、“黒人”と認定してしまうのである。

海 (*baru*) の彼方、遠方の世界にも人が住んでいると、かなり昔から伝えられてきたことは、前節で述べておいた。過去にオランダが台湾を植民地として占拠していたことは歴史的事実だが、この話は風の便りに山地まで届き、内実を失いながらもマイリナフの住民に語り続けられてきた。マイリナフの住民にとって見たことのないその人物は *matanah tonox* (紅い・頭)、つまり「紅毛人」ならぬ「紅頭人」と称せられたのである。彼らがこの山地まで来たことがあるとか、あるいは素裸であったとか、矮小化された話として今の世に語り継がれてきたのだが、視野界から遠く離れた世界の住民に対しては、やはり虚像を懐いていたことになる。なお、この「紅頭人」という表現は、現在では欧米人一般にまで拡大されて使用されている。

以上までの記述を補足する意味で、ここで馬淵東一が高砂族の地理的認識について論じたさいに用いた「生活圏」「見聞圏」「伝説圏」の概念を吟味してみるのがよいだろう。台湾山地民では、日常の社会生活の営まれる領域については詳しい地

理的認識をもち、その外郭には二重に知識の領域が取巻いているありさまが、その論文では論じられているのである。その論文の主旨は、山地民の抱く地理的認識は社会・政治組織に規制されていると説くことにあったが、さしあたりここでは、個々の概念に触れておけば事足りる。すなわち、「生活圏」とは「日常生活に於いて直接交渉ある領域」の謂であって、日常的経済活動つまり焼畑農業、狩猟・採集活動そのものが、これら知識の拡大と保持とに役立っているとされる。「見聞圏」とは「生活圏」の外廓をなし、「諸種の見聞を通じ一層広範囲にまで拡大延長せられている地理的知識の圏域」とされる。首狩りの遠征、あるいは交易関係もしくは婚姻関係がこの「見聞圏」の地理的認識の拡大に貢献する。これに対して「伝説圏」とは超現実的な色彩を帯び、口碑伝説の形で語られる圏域である〔馬淵東一 1941 (1974: 239—243)〕。

この地理的知識の領域の三重構造論は、人間集団の弁別の仕方を観察するさいにも、有力な暗示を与えてくれるだろう。それらのうちで、「生活圏」と「見聞圏」とでは、程度の差こそあれ、自己の体験の中で培った知識の体系が維持されていて、自己を取り巻く人間集団は詳しく観察され、かつ総合的観点からその相同性や異質性が捉えられる傾向にある。自己の属す集団に対しては、相互交流の手段である言語によって、身体形質の類似性によって、立居振舞いや入墨・装飾品などの外形的特徴によって、つまり総合的観点から同質性が確認され、そして日常生活で交流が保たれる限り、いわばお互いに相手を自己の視野の中に収めている限り、同朋意識が維持されていく。他方、自己と異質な人間集団に対しては、言語をはじめとした文化的特徴、身体形質上の特徴のいずれか、もしくは両方で、自己との異質性が抽出され、強調されていくのであるが、自己の視野が届かなくなるにつれ、それだけ対象の全体像は曖昧となり、知識自体も漠然としてくるし、異質な集団の捉え方も断片的となり、かつ断片化した異様性のみが強調されることになる。その異様性は、タイヤル族では皮膚の色つまり身体形質上の相異に求められたが、それは理由のあつてのことである。身体こそはもっともありふれていてふつう一般に日常

生活での尺度として利用するには恰好な存在であるが、他方では身体的特徴は自己との差異を表現するにもっとも手頃であり、かつすべての人間に抽象的思考を経ず、即物的にその違いを認識させるのにもっとも簡便な存在にほかならないからである。かくして遠方の住民に対しては身体形質に基づいた異様性が着目されて映し出されたのだが、日常体験の及ばない、また自他の相異を内省的に判断しえない「伝説圏」の住民に対する知識は、たんなる異様な存在という認識にとどまらざるをえなかったことになる。

(附記) 本稿の基になった野外調査は、1982年8月—1983年3月、および1983年7月—9月に実施された。調査にあたって、中央研究院民族学研究所(台北、所長・文崇一、後に劉斌雄)により多大な便宜を受け、また調査地の村民にも数々の厚意を受けた。感謝するしだいである。

引用文献

- 青木虹二他編 1968『日本庶民生活史料集成』第5巻、三一書房。
 ———編 1969『日本庶民生活史料集成』第4巻、三一書房。
 本田利明 1798(寛政10)『西域物語』(『日本思想大系 44 本田利明・海保清陵』岩波書店 1970, に所収)
 岩崎俊章編述 1851(嘉永4)『東航紀聞』(青木虹二

- 他編 1968, に所収)
 神部武宣 1972「〈人種〉概念の批判的考察(1)」『成蹊大学文学部紀要』8。
 鹿野忠雄 1938「台湾原住民族の人口密度分布並に高度分布に関する調査」『地理学評論』14—9。
 古賀謹一郎(憂天生) 1849(嘉永2)『蕃談』(青木虹二他編 1968, に所収)
 馬淵東一 1941(1974)『山地高砂族の地理的認識と社会・政治組織』『民族学年報』第3巻(『馬淵東一著作集』第2巻, 社会思想社 1974, に所収)
 最上徳内 1790(寛政2)『蝦夷国風俗人情之沙汰』(青木虹二他編 1969, に所収)
 荻生徂来 1736(元文1)『南留別志』(『日本随筆大成』第2期第8巻, 吉川弘文館 1928, に所収)
 岡田謙 1944『未開社会の研究』弘文堂。
 臨時台湾旧慣調査会 1917『蕃族慣習調査報告書』3巻, 台北。
 ——— 1918『蕃族調査報告書』(大么族前篇), 台北。
 ——— 1920『蕃族調査報告書』(大么族後篇), 台北。
 台北帝国大学土俗・人種学研究室 1935 a『台湾高砂族系統所属の研究(第一編)』
 ——— 1935 b『台湾高砂族系統所属の研究(資料編)』
 台湾総督府警務局理蕃課 1938『高砂族調査書』5。
 鈴木二郎 1976「エスニシティの新しい意味」『社会人類学年報』2。
 鳥越皓之 1981『最後の丸木船』お茶の水書房。